

# HopStepJump ①

<https://toyono-jinjikyoo.com/>

## 授業づくり①

### — 学習指導要領と授業について —

令和2年度(2020年度)、豊能地区公立学校 初任者研修・新規採用者研修に167名の先生方をお迎えしました。豊能地区(豊中市、池田市、箕面市、豊能町、能勢町)は、政令指定都市を除くと、全国で初めて人事権の移譲を受けた市町です。豊能地区の子どもたちのために、皆さんとこの研修を通じて共に学び合えることをうれしく思います。

今年度は、新型コロナウイルス感染症等の予防のため、開講式及び第2回の初任者研修・新規採用者研修は中止としました。また、第3回においても動画による研修となりました。豊能地区の法定研修では、研修を通じて考えたことを共有し、受講者一人ひとりが、学びを広げ深めることを大切にしています。通信“HopStepJump”は、豊能地区で行う共通研修の振り返りシートをもとに作成されます。直接意見を交わすことができない状況が続きますが、通信を読むことで、研修を振り返るとともに、受講者の皆さんがつながり合い、高め合うきっかけになればと願っています。

第3回初任者研修は、能勢町教育委員会学校教育課の辻課長より「子どもの力を引き出す授業づくり」をテーマに演習を交えてご講義いただきました。講義では、子どもたちをしっかりと見取り、関係をつくり、力を引き出していくこと、そのための声かけの方法や、具体物を用いて子どもたちに意欲をもたせること等、授業づくりの心構えに重点を置きお話いただきました。後半には、指導案の書き方についても、ポイントをしばりご教授いただきました。

子どもたちの気づきや考えを引き出し、深めていくために、発言力のある児童だけでなく、考えをもっていてもなかなか発言できない児童がいることを意識した授業づくりをしたいと改めて感じました。そのために、日々の学級経営の中で、価値観の多様性や失敗、間違いを認めていき、安心できるクラスになるように取り組みたいと思いました。

日々の授業づくりでは、担当学年の学習だけでなく、前後にはどのような学びがあるのかを知るために、学習指導要領を読む必要があると感じました。また、子どもたちが意欲的に学習できるように、教科書だけでなく、絵本や図鑑等の資料、ICT機器を活用して、興味をもって授業に参加できるようにしたいです。

最後に、自身の感覚として、ものごとをいろいろな角度から捉えられるように、先輩の先生方の授業や学級経営の取り組みの見学をさせていただき、子どもたちの見方や関わり方を学びたいと感じました。

今回の研修を通して、日頃からより意識して取り組んでいきたいと思った点が3点あります。まず1つ目は、授業中に「わかった人?」「できた人?」という声かけを多用しないことです。全員参加の授業になるように「もう一度説明してほしい人?」や「友だちに聞いてみたい人?」などの学び合いにつながる声かけをしていきたいと思いました。

2つ目は、「静かにしなさい」「廊下を走らない」などのマイナス言葉や否定言葉を使わないようにすることです。自分に余裕がない時こそ、落ち着いてプラス言葉や肯定的な言葉に変換できるようにしていきたいです。

3つ目は、授業づくりです。高め合う集団をつくるために、まずは導入で不思議さや不都合感から興味をもたせ、発問で揺さぶりをかけて、子ども自身が考える力をつけられるように工夫していきたいと思いました。

現在は臨時休校中で、子どもの姿や表情が限られた時間でしか見ることはできませんが、学校が再開しクラスに全員がそろった時、安心して学校に来ることができるようにならなりたいと思います。

「教室は間違うところだ」「子どもは分からないから学校にくる」という言葉が心に残りました。授業では、正解をもっていかうとしてしまいそうですが、間違うことも子どもたちの学びの

チャンスだと思いました。子どもに対してどう問うのか、どう伝えたら子どもの学びが深まるのか、発問を意識していこうと思いました。「やる気のない子はいない。やり方が分からなくて困っているだけ」という言葉を聞いて、子どもの行動には必ず理由があるのだと思いました。子どもの力を信じて、それを最大限に活かしていくために、まずは子ども一人ひとりをしっかり理解することから始めたいと思います。

「どこからそう思う？」という言葉投げかけることで、多くの子どもが事実を見つけることができるようになりました。「どうしてそう思う？」と聞くよりも、子どもの学びの幅も変わってくるのだと思いました。教室では、多様性を認め合い、発想を活かしていくことが大切だと分かりました。一人ひとり考えがあり、思いがあるので、一つの枠に収めないように、子ども一人ひとりが自分を表現できるようにしていきたいです。子どもたち自らが学ぼうとするような、わくわくする授業を行いたいと強く思いました。

「生徒一人ひとりに光が当たるように」という言葉が印象的でした。挙手により発表の場を設ける場合にも、よく手が挙がる人ばかり当ててしまうと、同じ人だけで授業が進んでしまうので、発表が苦手な生徒の活躍の場を設ける方法を考えていかなければならないと思いました。

また、数学の授業において、「自分で発見したことこそ、本当に価値がある」という数学教育改革論ペリーの言葉も、今後の授業計画で意識しなければならぬ考えであると感じました。

授業づくりでのポイントでは、子どもたちは初めて学ぶので「わからない、知らないで当然」という考え方は、自分自身が大切にしていきたいと感じていたことの一つだったので、より強く意識して授業を行っていききたいです。

生徒への発問時の言葉遣いでも、一言変えるだけで生徒の答え方が変わり、クラス全体のより深い理解につながることも話されていたので、生徒に対しては細部まで注意し、意識した発言に努めていきたいです。

「子どもの力を信じ、それを引き出すことが必要だ」という内容がとても印象的でした。このことを意識せずに授業を行うと、手を挙げている子どもだけで学習を進め、子どもたちを学ばせた気になってしまうのだろうということが想像できました。「何を学ぶのか」「どのように学ぶのか」といった点に対する意見を教員側がきっちりともっておくことができなければ、子どもの力になるような授業はできないということを改めて知ることができました。また、自分なりの考えをもつためにも、教材研究に励むとともに、教材と学習指導要領との関連や教材どうしの系統性といった点にも注目し、義務教育である9年間の到達点を見据えることが必要であるということがわかりました。

自分の目の前にいる子どもたちと向き合いながらそれぞれの力を引き出すためには、一辺倒な授業スタイルではなく、様々な工夫を凝らすことが必要であると感じました。日々の授業をこなすのではなく、一回一回を大切に扱い、教員自身が学び続け、模索し続けることが大切だということを強く感じる研修でした。

講義の中で、授業を改善していくための手立てとして、他の先生の授業を見る、書籍を読む等、具体的に示してくださいました。何か1つでも試みると、そこには授業改善につながる気づき必ずあります。焦らず日々の授業を大切に、実践を重ねていきましょう。

「一生勉強、学び続ける教員に！」という文を見て、その通りだと思いました。臨時休業中であり、子どもたちと関わっている時間は多くはありませんが、その少ない時間の中にも私自身、子どもたちから学ぶことがたくさんありました。そして、先輩教員に指導いただいたり、同期の教員と話をしたりする中でも多くの気づきと学びがありました。自分自身を振り返り、これからも学び続ける意欲をもって、教員を続けていきたいです。

豊能地区教職員人事協議会のめざす教職員像は、「子どもとともに学び続ける教職員」です。研修で身につく力は、受講者の「研修への前向きさ」でその幅と深さが異なるといわれています。「参加する」「受講する」といった受動的な態度ではなく、自ら積極的に「求めていく」心構えで受講してください。